

遺品が物語る人生を伝える



日本初の遺品整理会社を起こした吉田太一さん。
たとえ死後何日経過しようとも、依頼を断ることはない。
遺品整理をとおして浮かび上がる孤独死。
現代社会の闇を見つめてきた吉田さんは、その先にいつも“生”を見つめている。

取材・文／関原美和子
写真／八木実枝子

遺品は、持ち主と

一緒に住んできた「同居人」

使い込まれたテレビや冷蔵庫、布団にちやぶちやぶぬいぐるみ、剥製、アルバム……。倉庫の一角に置かれた様々なモノたち。共通している

のは、全て「持ち主」を失ったということ。

「これらの遺品は2か月に1度、ここで合同供養を行います」

遺品整理を専門とする会社「キーパーズ」を立ち上げた代表取締役の吉田太一さんが静かに視線を向けた。

遺品整理と一口に言っても、仕事内容は、貴重品の捜索や清掃、消毒・消臭作業、廃車手続き、遺品供養、葬儀や僧侶の紹介など多岐にわたる。依頼は年間約2000件。そのうち9割が一人暮らしで、半数が孤独死の遺族からのものだ。

「孤独死の約2割、200件近くの依頼が死後何日も経ってから発見された方々です」

からだが朽ち始めて死臭を発すると、無数の蛆虫が発生し、ハエに成長する。季節や条件にもよるが、盛夏ならば3日もすればこのような状況になるという。部屋から死臭が漏れ出し、隣人や新聞配達人などによってようやく発見される。誰かが心配して見に来るのではなく、クレームによって見つけるのだ。

こうした孤独死のケースの場合、遺族とも疎遠になっていることが多く、また、あまりの惨状に立ち入ることさえできず、わらにもすがする気持ちで、キーパーズに依頼をしてくるのだという。

「だから、うちの会社ではどんな依頼でも決して断ることはせんのです」

しばらくしてトラックが戻ってきた。荷台からほんのかすかに漂う異様なにおい。

「夏場ならもつとすこいですよ（笑）。鼻に割り箸を突っ込まれたようなにおい。何にたとえられるかよく聞かれますが、……うーん、たとえば「死臭」といふよりほかに「生臭」のようなにおい。死臭というより「生臭」に近いにおい。支店内に設置している祭壇に遺品が積まれてゆく。

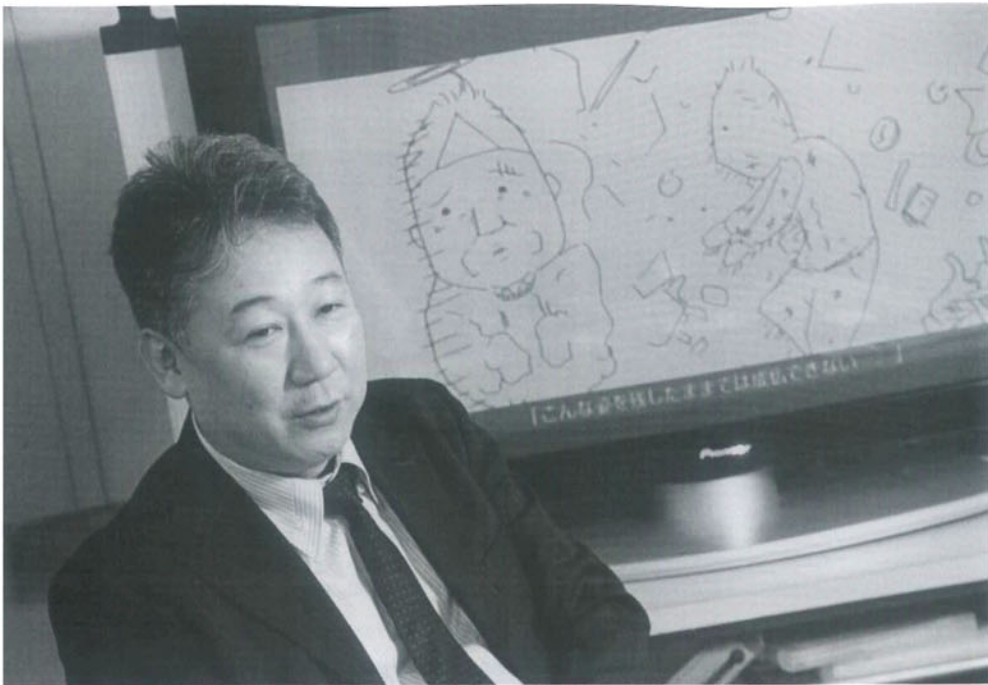
「遺品は、持ち主と長く一緒に住んできた、いわば唯一の同居人です」

持ち主の最期を看取ったであろう「同居人」は、持ち主のもとへ旅立つ日を心待ちにしているように、ひっそりとたたずんでいた。

「天国へのお引越しの お手伝いをしているんだね」

寺に生まれたわけでもなければ、身近な人を不意に亡くしたわけでもない。「生や死に特別な思いをもっていたわけではなかった」吉田さんが、遺品整理屋を始めたのは、あるお客の一言がきっかけだった。

「このたんずは私のところへ、あの冷蔵庫は妹のところへ送ってください」——故郷、大阪で引越しの運送会社を経営していた吉田さんはある日、荷物の送り先がばらばらの見積もりを頼まれた。一通りの送り先を聞いた後、まだ残っている家財道具をどうするか依頼主に尋ねると、これからリサイクル業者を探して引き取ってもらうという。当時、リサイクルショッ



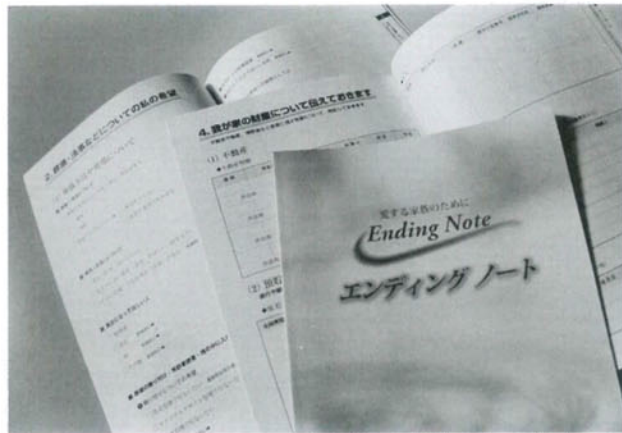
「人生の最後を扱う仕事だからこそ、ホテルマン並みのていねいな対応が必要」と吉田さん。「究極のサービス業です」

仕事師たちの群像

プロフィール

よしだ・たいち

キーバース代表取締役。1964年大阪府生まれ。83年大阪市立桜宮高校体育科の第1期生として卒業。日本料理の板前を経て、運送会社勤務。94年引越運送業を始め、2002年、日本初の遺品整理専門会社、キーバースを設立。マスコミから注目される。現在、全国4か所で事業展開。孤独死をテーマとしたDVDやエンディングノートを作成、無料配布しているほか、全国各地で講演を行っている。著書に『遺品整理屋は見た!』『遺品整理屋は見た!! 天国のお引越しのお手伝い』(ともに扶桑社)、『おひとりさまでもだいじょうぶ。』(ポプラ社)、『遺品整理屋は聞いた! 遺品が語る真実』(青春新書)がある。キーバースホームページ: <http://www.keepers.jp/>



「自分自身と残された人々のために、エンディングノートを役立ててほしい」と吉田さん

「自分を認めてほしい、ほめてもらいたいと思うなら、まず相手を認めてほめてあげなアカン。そうすれば相手も自分を認めてくれる。」

最近の子どもたちはやたらと「親友」を求め、彼らのいう親友は、自分たちの決まり事やガチガチに縛り合うような関係でしょう。友達って、本来はお互いを認め合い、許し合える関係のはずです。そんな「親友」より「本当の友達」がたくさんできれば、孤独死の可能性は少なくなる。そう信じています」

いくつもの「死」を見つめてきた吉田さんは、「生」と真正面から向き合っている。

「介護保険が適用される65歳以上なら、訪問介護で定期的に訪ねてくれるので、死後の発見が遅れることはそれほどないんです」

50〜60代だけではない。昨年末亡くなったタレントの飯島愛さんのように、30代、40代の働き盛りの世代にも孤独死は訪れる。

「必ずしも、誰かに死を看取ってもらわなくてもいい。ただ、異変にすぐに気づいてくれる人が身近にいることが大切なんです」

遺品整理を始めて7年目。吉田さんは今、新たなことに取り組んでいる。

「遺品整理は『死』を扱う仕事ですので、これ以上先がありません。幅を広げようと思える」

「自分からアクションを起こすこと。」

「自分を認めてほしい、ほめてもらいたいと思うなら、まず相手を認めてほめてあげなアカン。そうすれば相手も自分を認めてくれる。」

最近の子どもたちはやたらと「親友」を求め、彼らのいう親友は、自分たちの決まり事やガチガチに縛り合うような関係でしょう。友達って、本来はお互いを認め合い、許し合える関係のはずです。そんな「親友」より「本当の友達」がたくさんできれば、孤独死の可能性は少なくなる。そう信じています」

いくつもの「死」を見つめてきた吉田さんは、「生」と真正面から向き合っている。

「日本初、いやおそらく世界初の遺品整理会社を起こしたんです」

最初の頃こそ手探りだったものの、ホームページを立ち上げると、切羽詰まった遺族からじわりじわりと依頼が来るようになる。

仕事は軌道に乗った。しかし、一方で自分の仕事に疑問を抱くようになる。

「遺品整理は、本来遺族がやるべきこと。ビジネスにしてしまうことで、これまで日本人が大切に紡いできた絆を断ってしまうのではないかと思っただけです」

悩み続けた吉田さんに転機が訪れたのは、会社を立ち上げて4年目のことだった。仕事を理解し長く続けてくれる従業員を確保したい思いから、仕事の内容や具体的な現場の様子、自分

「そのとき、部屋にご遺族の遺影と骨壺があり、遺品を整理されたのだとわかったのです」

これまでにないほど感謝された吉田さんはふと思いついた。以前も遺品整理のような引越しを請け負ったことがあり、そういう現場ほど、強く感謝されたことを。

この仕事を専門にやってみたいと感じた。調べてみると、遺品整理の専門業者はどこにもなかった。全国の葬儀関連のホームページに宣伝を持ちかけてみると、ようやく愛知県1社から賛同を得ることができた。その社長と直接話すと意気投合。合併で子会社を愛知に設立してスタートすることになった。

「日本初、いやおそらく世界初の遺品整理会社を起こしたんです」

の思いなどをブログで発信。雑誌やテレビなどから注目され、さらには出版されると、1日のブログの訪問者数が1000人を超えるようになった。応援してくれる人がたくさんいることを知った吉田さんは、自分の仕事がちがっていなかったことを確信した。何より、遺族の感謝の言葉が吉田さんを勇気づけた。

遺品はある意味、故人の人生を語っている。「私たちが遺品を片付けることで、全てきれいにしてあげる。遺族を精神的にも時間的にも楽にしてあげられたらと思うんです」

ある現場で遺品を整理していたとき、その家の小学生の孫が話しかけてくれた「おじちゃん



キーバースで働くスタッフは現在20人。特別な社員教育はしていないという。「お客様からの感謝の言葉が彼らを育てているのです」

「誰かの存在が大切」

これまでいくつもの現場をとおして、いやというほど見てきた孤独死の現実。一人でも孤独死を減らしていきたいと強く思うようになった。

孤独死と聞くと、老人が多いようなイメージがあるが、意外にも55〜64歳の一人暮らしに多いという。

と、そこからさかのぼって、「生」を対象にすることにしています」

仕事といっても、直接利益に結びつくものではない。キーバースでは、「独居老人の孤独死」というアニメDVDを作成し、希望者に無料で配布している。煩わしさから家族や近所とのつきあいを避けていた老人が孤独死の1か月後に発見される物語で、息子や大家など周りの人間に降りかかる「災難」がリアルに描かれている。

さらに、「エンディングノート」も作成。自分や家族のプロフィールやいざというときの自分の希望、財産の処分などを記入するもので、自分史と遺書のような構成になっている。ホームページ上で希望者に無料配布を呼びかけたところ、瞬く間に1万部を完配。新たに刷り直した。「ノートに記すことで、自発的に誰かとかかわろうと考えるようになります」

そのためには、まず自分からアクションを起こすこと。

「自分を認めてほしい、ほめてもらいたいと思うなら、まず相手を認めてほめてあげなアカン。そうすれば相手も自分を認めてくれる。」

最近の子どもたちはやたらと「親友」を求め、彼らのいう親友は、自分たちの決まり事やガチガチに縛り合うような関係でしょう。友達って、本来はお互いを認め合い、許し合える関係のはずです。そんな「親友」より「本当の友達」がたくさんできれば、孤独死の可能性は少なくなる。そう信じています」

いくつもの「死」を見つめてきた吉田さんは、「生」と真正面から向き合っている。